

緑字生ズ 紙田 彰



エッチング/滝本 厚

（以下は本文の複製ですが、非常に小さく、ほとんど不可読です。本文は紙田彰の「緑字生ズ」に関する文章と見られます。）

へ人の海」の中の真正の孤独／たしかに実在的現実が死んでいる空間に感じられる。だが、現実とのバランスの力が圧倒して、ついにはそれがそれ自体で実在的現実を圧倒して存在したような形跡もある。〈妄想の発現〉／妄想は共同社会に認知されると妄想ではなく／妄想は構築力を持つ。表現ではない、つまり交通形態を持たない。〈連想法による言語の自動性〉コンピュータを使用した無意味連想法の場合、あらかじめ意味伝達機能の定められているコンピュータ言語にランダム係数という反意味的有意性が装置されただけで、意味伝達の遮断という意味性を目的として機能し、アウトプットされたものは構築力を持たない。意味性の死骸としてのパターンの羅列となるにすぎない。これに反して作品言語は初めから通用性を持つ必要はないから、連想法という初歩的手段でも、生きた無意味性ともいうべき、ある程度の構築力のベクトルを示す。そしてそれは一箇の人間存在が世界を相手に妄想して取り込んでいる内世界と妄想的自己との関係から構築されるものであって、現実つまり外的な世界という先験性、肉体的な自然という絶対性とは無関係である。あらゆる飛躍が可能なのは、この妄想建築の場面である。だが、これが共同社会で認められれば、妄想はたちどころに崩壊し色褪せてしまう。つまり、現実的な意味が生じたときに、飛躍は飛躍でなくなり、ただのあたりまえの停滞になる。〈時間の超越〉時間が光の直進性によってその絶対性を保証されるならば、光は別の光の集合による偏倚を受けて、終局的にはつねに渦状の滞りてしかたない。またその渦を形成する光を直線的に捉え、その内部でしか方向感覚を持たぬならば、光を通るといふ無限の空々めぐりをすることになる。空間が時間の対語ではないという場合においてのみ空間という語を用いるならば、全体性は時間を超越できるだろう。つまり光を軸とする幾何学、物理学とは無縁に、光の迂回性を星屑のありように置き換えられる。〈眼〉を持つことの可能性。宇宙膨張説は光の迂回性を光の内側から見ることによる渦状の限定性ということ。光を横切ることが空間の全体把握になるということ。そうすると、たしかに宇宙は無辺である。その理由として、無限にさせるべき光の内側の論理をも抱え込んでいるとの謂。振れが及んでいないのは全体ではなく、光に照射された時間によって決定される宇宙だけであり、宇宙は空間的に無辺であるとしても妄想できない。ここで我々は、光がもつとも遅滞して触れることさえできる。〈物質〉が宇宙のありようと無限の近似値をもち、普遍というものが超越的な思考のうちにしかないという普及を、それぞれ同時に充たすことができる。〈物質は幻惑〉／〈ハイズマン〉。妄想は茫漠としながら拡散し、三角測量法。文学とはこのもつとも自由な妄想の反現実。物質と世界との一致／光を横切ること。横切ることでもない。横切るといふたこの現実に向かうことではない。また光の方向、つまり影という己れの暗い夜を一瞥することもない。横切るといふことは、深く存在する妄想の世界を実現することである。世界とは普遍的に無数の種類の現実であり、綿密な構成によって細部まで構築されているわけだが、我々の抽出せるのはこれら部分でありながら、この部分の獲得が普遍的に無限の数を持つ世界のありようを物語っている／書き手の安易な移動。たとえ書いてある言葉にのりつること。また使用している器物（思惟、観念、イメージ……）にのりうつること。向こうの側から現実の自分が解剖され、夢見られているという方法。単純な推移。連想法の物語主体へのアナロジー／〈ヒステリー〉(i)ヒステリーに対する防衛措置として妄想の場面への拒否反応。たとえば夢および神秘体験に対する拒絶、放擲性、(ii)抑制的人間の妄想場面への参入。(iii)における地図恐怖症、内臓・精巣・卵巣拒絶、および宇宙論恐怖。耐性、人間存在への不可避的な信頼（つまりアイデンティティのこと）への逃避。(iv)における、定められた危機、能力を超えた妄想場面における自己崩壊。あるいはそれを射程内に置いての冒険主義。現在に対するサティスム、つまりマゾヒスム／〈妄想場面におけるバランス〉存在のヒステリー。ヒステリーの軸を時間的に置くか、未来に置くか（未来とは現実ではないということ）で過去に含まれる）など、軸の設定に左右される。現存に置く場合は防衛的で安定的であり、それ以外に置くときは攻撃的で構築

力を持つが、特に過去に置くときは病的傾向が拡大される。ただ体験していない過去はなら未来と変わることはない。現在が過去の連続性であると決めつけると、妄想は創造的な場面から離れて病的様相を深める。病的妄想から逃れて妄想を可能にするには、すべての断面をある特定性へと収斂させないことである。頭脳およびその心理的、精神的受皿は無限定の妄想作用によって容量と容器の変化を促される。(妄想訓練)(妄想期致)(歴史時間の停滞)歴史が現実の時間とは無関係、あるいは絶対的な関係をもたないということ。一方で現代資本主義が歴史時間を停滞によって開放しているということ。資本主義の歴史的發展を瓦解させたいということ。同様に社会主義諸体制も停滞し、時間のダイナミズムを失い朽腐しつつある。だがこれらは世界の老化というよりも、現実という泡沫現象にすぎない。政治的には、現実の時間を越える、あるいはそれを蔽う歴史的時間が存在しない、つまりあらゆる必然性が崩壊することによって現実認識が優先されて、左右の意義が急速に失われ、機構の自動化現象が起こり、密度の中で腐敗し調化してゆく。社会的には、循環運動が求心的に働き、あるサイクルの絶対性を越えることなく、あらゆる社会的冒険も泡沫現象にすぎず、パリエーションだけが問われることになる。いつかは、あのときから時間が停まっていたのではないかと思われる。だから何かをやろうという情熱が急速に失われていったに違いない。まるで悪夢をながながと見ているのではないかと思われ。けれどももうそうこうしているうちに肉体的な時間だけは確実に過ぎてゆく。家庭を持ち、子を生み、育て、老化している。それが現実だといわれればそうかもしれない。納得のいくもではない。生きている時間とは無縁の生物学的な個体の推移にすぎぬはずだ。では生きている時間、生きている世界はどこにあるのか。内的な世界、つまり無数の妄想断片をつなぎ合わせ、構築していく全体化の中にしかないか。停滞した現実世界と比較して、それは同じ質とそれ以上の量と永遠を持つに違いないのだから。精神病者は単一の妄想断片を持つといわれるが、正常者(?)は複数の妄想断片を同時に持つことができる。少なくとも現実と妄想断片aという二つの世界を同時に所有できる。そしてさらに無限の数の妄想断片を持つ可能性もある。個的には、それらをバラレルに所有して、それらの構築物を精神とすることもできる。これはたとえば、現実という絶対性が実は相対性として、つまり数十億の異なる現実が同時に存在している(地球の夢)と同じスタイルを持っている。だから夢あるいは妄想は現実にもう一つの現実であり、より多くの現実である。(妄想エネルギー)

緑字生ズ

洛書、五十六字、皆緑なり

張説の詩に

田廟青林古、新碑緑字生

と見える

晋書に 56

大禹親於濁河、而受緑字

唐詩訓解に

(濁えて硯田を築するといえども

あきらけく、わが産地は洛陽なり)

塚詰の魔の気体、やや粘り気のある
セラチン状で、夢の獲物

57

おお Nemesis 神々の憤り
会陰部が妙に割がれそうだ

58

曲がる指 溶ける軟骨
ランボーのことを考え
味噌汁をすする

霧よ 汝のしめりけが
精神を不快にさせる

死の朝を裂くような風 また
死人にクチナシのいりくんだ地図
青い顔の幽霊が這い出てきた

59

石の蔭で
床の蔭で
勁くしなう竹を埋める

月が射すと処女
竹の先に白い蛇がからみつく
女たちの喪服にも

あたしたちは装、みだらな造花

手紙を貰った男は女たちの薄倅を思う

別の男は、ひたすら悲しんだ
(へそつなきのへそに宛名はない)

女たちは馬

金網をめぐらせた公園で
だく足を使った

60

アンテロースよ

敵は味方の顔をしながらも敵
なれば、味方は第一の敵である

少年は箸を置いた

オヤシラズが疼いたのである
横になり、天井の疵から目をそらした

蛾が舞い込む

いまだ音沙汰もなく——
少年は pornography を聞いた

盲目になると盲点はどこに移動するか
少年は娼婦の部屋で考える
部屋を出るにあたり
ヴァレリーの詩集を買おうと決心した

61
幻の童顔

鬼ごっこをしている子供の肉が腐っている
礼魂に長無絶々終古とある
赤い織が黒ずんでいた

62

風の吹くままあら田の畔で
喰うも喰わぬも雨まかせ
おいらは日和のでんでん太鼓
おいらはむくろを野辺送り
舐るように胡瓜を摘む
そのとき手が青いのに気づいた
血が凍っているなど呟く
かすみれのあお天、裂けよ！

63

耳を尖らす馬を買おうと
うすむらさきの橋を渡った
夜の街には白い首の女たち
翌朝、土手に沿って戻ると
本馬がころがっている
これれものを抱くしぐさで跨ると
永劫を啖うヒキガエルが
流し目千里、
いつのまにかあてもなく疾っていた

64

真珠を噛み砕くと
いま、ぼくは狂う
えいのはだらにしっちゃっちゃ
れるっぱなもせりとささっばるねじほせに
ふぶくれてふへぐり
ふぶざれよ、げっぺんべえ
ああ、すでに孕まれていたのだから
精神を垂直に立てると
接ぎ目の部分が腫み始める

揺れる *swing*

智恵の木のたぐれ

織維ことばのことは生地

ともすればありがちななものもない

真珠を噛み砕くと、いま、ほくは狂う

魔の手に握まれたように

びくんと上体ふるわせ

棒状に伸びてぶっ倒れる

65

樹木の睡り

国家はどこにもないという嘘

嵐の夜に強姦された娘は

捨てられてからのことを思い悩んだ

66

方舟にわく蛆

噴水で沐浴するカエル

彼らはポロス石の泡を啜う

もう、夜だから、昼だから、早朝だから

意を決して、ざんぶ、水葬

67

断食者の首、鎖の鳴る音、うたたね、しのび笑い、

音にならぬ声、地下の泉への道、審判を待つ死た

ちの時間、……カイラドスの谷

68

長い旅の果てに

フィラリア病の老人が

樹木の睡りを眠る

黄色の雲がひとがたをして

天末線から――

69

街外れで

隊商の列を幻想した

ミイラの顔した男たちに

どこまで行くのかと訊ねる

膝まである布をまとった男たちは

黙って通り過ぎた

悪魔がいるから待ちなさいと叫んだが

悪魔がいるから死んじまえという耳鳴り

70 サルボウガイよ
錨は永遠に錆ついている
星色の小宇宙よ
星々の間が広がっているというのは
光の屈折による誤解だ

71 銀の首輪をつけ
腹をふくらませた牝犬のいる公園で
薄い色の体をもてあました市長が
演説をはじめた
そういえば、修道尼が見当たらない

72 愛の現場での燦々たるerotic
刺青師は年老いて
姦淫にまたたく股間で
ふるえている
夜ともなれば
女の骸を求めて
気のふれた傀儡がさまよいでる

死のような不協和音——
ヒッサリックの丘では
朝から待っていたように
磔刑の男のふぐりに
涙が落ちる

73 新聞配達人の投函でめざめる
土の家、水の庭
靴底に鍵をしのばせ
ひっこをひく
青い木苺を摘んでから
かたまく細流に達した
その中で硬貨が光っている
テッポウユリの咲いていたあたりは
枯野になっているが
虹がかかって見えた
山々は黄変し、花畑には灰
どこかに噴水でもあるのだろうか
山頂の濡れた展望台に辿り着く
ひと滴の宇宙の全貌——
細粒細工の雨の模様は女に似ている
想像の力が萎れているのだろうか

険に指をのせて
 痛みを除く
 雨宿りのための死の翳うすく
 白い煙が立っている
 白い形相で
 花を摘み取っていった男たちのことが
 頭の中によみがえった

74

脂の浮いた甲を包む、赤いエナメル靴
 地下鉄が空を走るなんて！
 まつわらぬ糸の女の顔を思いながら
 高架の下を歩いていると
 通り過ぎる友人に気づいた
 楕円形の好きな男である
 白い指で笛をあやつる男は
 ときおり茨で編んだ冠をして
 牛とか羊が好きだとも言った

まじめな聴衆を嚇すように
 星の囚人列車！ と叫ぶと
 男は背を丸めて笛を吹いた
 光は硬い、そして二度と出会わない
 樹木は灰になり、黒衣の女は自殺する

そう考えて、男は調子つ外れの音を発した
 哄笑の中で、膝を屈めて
 この思いを人は知らないのだと悟った
 男は鱗皮の靴を抱えて
 船員のように走り去った

高架の下で見た横顔には
 希望がロープでくぐられたような
 死の匂いが沁みている
 道筋の向こうには糸のような月
 その下で
 夜の森と肉色の街の灯が接している

75

妖しの声に窓の月
 指につたわる汗も淫らな

76

涙をどこかで暖めようと
 声を紐にして
 音のない窪地を歩く
 土の景色は黄ばみ
 少年たちの山嶺は青い

血管のたふたふ、神ながらの花
一六菊を茹でると

湯の中で煮れる太陽

雨の匂いに気づき

田の道から山々を仰げば

樹々は鎖のように枯れ果て

あらためて

死体に死を宣告する

ああ サテュロス

燃える野の……

草の滴が虹のように散って

遠く、あなたに広がる沙漠では

夢の夢が試される

77

マゲイは棘だけの生き物

棘でつくった針と糸

鋭い味の酒

鉄がカランチョのように

胸から死体を覗き見る

水面のきらめき、土の器、こわれた歌よ

あたし、切ったの

透き通る肌、あつくるしい抱擁
あなたをねぶると

光が内臓を殴打する

青い雲、緑のバイナップル

なんてけだるい驟雨!

ここはアジア

ものごとを決めつけるのは罪

でも、悪いことを悪いという修辭学は

退屈じゃないわ

たまには安酒だつて!

コロインを食んで

崖の上から

青い羊が転落する

あたし、黄色い舌の蛇

何も呪わなくてよ

鉄道はみな銀河経山

鍵束があたしを貫く

寂しい男たち!

燃えるガラス玉!

眠い目をこすりながら心中しても

くるぶしまでの芝居

あなたは、そう、ひとりつきりて

鞍型の頂から
星に向かう星

(宇宙の空腹って何のこと？ そう訊いて旅立っ

た女よ)

太初、肉はそのあたりに散乱していた

秘密を明かそう

噴火口の前で

マリアとヨハネが抱き合っていた

下駄の歯を

風の裂目に蹴り上げた

湘南電車で太陽を見よう

少女の黄色い肌を見よう

幼い爪にマニキュア

アブラゼミを狙う捕虫網が届かない

子供の背丈の不足、畸型の時間

かたわらで男がにやついている

スズムシやクツワムシの声を幻聴して

男は夜ごと烟に包まれていた
なぜ部屋に風は入らぬか
もちろん蚊の大群とともに

少女が叢で強姦されたと知り

旅に出ている

地むぐりの神話はどこにでもある

エジプトでは崇高さ

ギリシアではメドゥーサの哀愁

キリスト教では悪徳の知恵

けれど、女たちは

どこにあっても岩塩のこびりついた器

ある夜、泥酔して

ゲテモノ屋に這入りこんだ

酒漬けの肝臓が苦く

旅の疲れにも飽いていた

ファイドリアテスの断崖で

女の赤い舌が突き出されていたのを憶えている

憎悪の持ち数が減り

自分の体が甘くなつて

甘い哀しみとなつて

地べたに伏していたらしい

81

なにもものかに死が扱われた
スナモグリののように
君は十字路から駆ける

——後を追う John C. G. 亡霊

ゆきだおれの魂という、魅力的な宿命論

死のうちに放擲された夜もまた

死のままに己れを復元していたのだが

——ところで、墮天使の魂は？

夢の材質と信じて

拷問室の壁に接吻する女

三十六の方向に開いた

光の固形物という考え方もある

——「地獄は天獄の参道」という人の話だ

金髪の美女の首を抱く、黒人の死よ

のたうちまわり、火そのものを構成しているような

壁の中で啼く、三つの死よ

明るい時代、明るい未来のある時代、恋人たちの

健康な時代

街娼を求めて

地球の裏側でマルセラに出会う

詩集を売っていた少女が

ふとしたはずみで、夜の、黒い仮面をかぶる

82

間の凍りつく動悸に冒され

離婚して、若い女と暮した男

音楽の器械をつくり、子供ができ

すぐに死んだという話が伝わり

もう出会うこともない

朽葉の音は灰色

風さえ冷たく発狂し

キバシヤヤマシギの白い影があるばかりさ

空間がねじれているから、そう思う

意味のないことを喋って訣れ

音のない世界のことを考えていた

男の店への通路が曲りくねっている

地下室で原子が死をぶつける

音楽は群がり、塊となり

けもの呻きのように

永遠の夜がつづく

……………

開いたために折りを——
男の死の朝に

そのことがふたたび忘れ去られる
昼食に出ています

今日が最後の日です

男は、明るい光のあるうちに
死んでしまったであろう

83

尖った強迫観念

down townのとあるバーで

手を洗う酔払いのニグロ

カウンターの金が減っていくので

水を噛み砕いた

風の噂に

黒い髪の女が裸で失跡したという

あの、独立家屋にいた女

庭を掘り起こすと

Bakuninの著作と嬰兒の小骨

目の覚めたときにする思い違い

今年もまた暑中見舞が来た

phantomsの一つの枝に
白い首がぶら下がる

夏が過ぎ、また同じ夏がめぐる

けれども、宿命というよりは永遠

心が破れるというよりは

酔いつぶれていた

——また黙って旅に出ている

人間をさらに進化させて翔ぶ

翅の、謎めいた

ふん、

夜だ

友人たちは

人間の中にはいないとも思えてくる

意志を支えるものは

反世界的な無為と

永遠に加速する死だと

また旅に出て考えている

一文字に収束する烈風

マルセラという名の地の女神よ

神の素因に抱かれて

Los Angeles 1975

人々が狂いはじめていた

84

うちよせる波。巖の暗い穴に。人の波。海原でふたたびこわれてうちよせる波。白いしぶきめがけて真紅の鴉が落下する。いや、赤い眼をしたオットセイだ。井戸から汲み上げた水が濁る。ところで、冷たい風はなぜ娼婦たちのように優しいのか。花嫁衣裳にガマガエル、ああ蛇の唸りのなつかしさ。コバルト色の水平線が烟る。水晶体のくもり、眼を蔽う血、蒸発する血。雲が染まってゆく。けれど、太陽はこれから五十億年は動きを停める。イエス・キリストよ、汝は溶媒。そういえば、朝が来たという話を聞いたことがない。それなら機は熟している、革命前夜だ。そうだ、朝はない、昼と夜ばかり。フランスパンを齧ると経血の味を思い起こす。さてよ、おれの体を切り刻むのは誰だ。知覚が麻痺しているのか。銀色の髭を生やした医者科白。眼には楓、口裏には燃えるインク、顔全体が銀色。髭が伸びすぎてそう見えるのだろう。しかし、眼だって口だってなかったぞ。腕だって、もしかすると胴体もないのではないか。診察のとき、おれは銀色の髭に包まれていただけなのだ。そうするとあの医者、髭を剃ろうとして間違っ

て肉体の方を剃り落としてしまったに違いない。あの先生、あわてものだって評判だからな。でも残された銀色髭にしてみれば、そんな噂をする方がおかしいと思うにきまっている。肉体など剃られるのが当然で、それを馬鹿げたことという連中はよっぽどオボチユニストなのだから。銀色髭先生はおれのことを、後天的逆行性知覚神経不全、つまりもう存在していないようなものだねと診断した。はつきり喋ったのだ。——おぞましい、どこに言葉が発する器官があるんだ。機能障害、いや機能喪失はやっこさんの方だぜ。ん、いま気づいたのだが、おれのあの部分がなくなっている。すっぽり切られている。あつ、痛つ、おれの足を喰っているのは誰だ。いや、犯人は時間そのものを喰っている。おれなぞ目じやないのだ。おれの口は——あ！おれの口が勝手に動いている。何だ、何を喰っているんだ。味覚も触覚もない。ただ胃が重く、さりながらおれの体が軽くなっている……。シュプレーガテス、鳩は肛門の共犯者、銀のスパーンに指の脂がつく。洞窟のたったひとつの出入口が光線の加減でいつそう蒼く見えた。